
魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

【Nコード】

N5132Y

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

ルーンランド魔法研究所の所員イ・コージは独身・彼女なしの38才。

今日も無茶な依頼に振り回されて羽目に。

この作品は作者が書いているザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方のスピノフ作品です

イ・コージの日々（前書き）

ネタキャラから幕間主人公へ、そしてとうとうイ・コージはオリジナル小説の主人公になりました

イ・コージの日々

魔法王国ルーンランド

剣と魔法の世界オーディヌスで魔法に重きをおく国。

当然、魔法の研究には、かなりの力を入れている。

その中心はルーンランド魔法研究所、幾重物の魔法結界に保護された3階立ての建物は、広大な敷地に建っていた。

そして魔法研究所に1人の男が出社して来る。

ぽっちゃり体型に短い黒髪に黒縁眼鏡、お世辞にも美男子とは言えないの容姿を持つ男の名前はイ・コージ。

38才独身彼女なし、ちなみに研究所には、つい最近スカウトされたばかりである。

前は違う国の魔法研究所で働いていたが、人にはあまり言えない理由で退職をした後にルーンランドの魔法研究所にスカウトをされたのだ。

中途採用とスポンサーのない哀しさかイ・コージにあてがわれている研究室は決して広くはない。

イ・コージは人より早く出社して研究室を掃除した後に研究室で朝食を食べる。

朝食と言っても前の日に買ったパンとお茶だけの侘びしい物。

一人暮らしの侘びしい部屋で侘びしい食事をする位なら実験道具に囲まれて食べた方が、侘びしさも薄れるし時間短縮にも繋がるからである。

あらかた食事を食べ終えたイ・コージに1人の女性が声を掛けてき

た。

「またー研究室で食事ですかー？いいですけども栄養にも気を使つて下さいよー」

彼女の名前はリア・クローゼ、イ・コージの助手である。

年は二十歳と言うがボサボサの髪を紐で結わえ、でかい眼鏡をかけて化粧もしていないから、それが本当かはどうかは見た目では分からない。

「リアさんおはようございます。栄養は昼にとりますから、それで今日は新しい課題は届いていませんか？」

イ・コージの様な新参加者が好きな研究を出来る訳がなく貴族や商人からの依頼をこなしていくしかない。

「来てますよー。今回は騎士団から研がなくていい剣を作って欲しいそうですー。お坊ちゃま達は武器の手入れより髪や服の手入れが大切なんですよねー」

リアが言っているのは決して悪口ではなく、魔法王国のルーンランドにおいて騎士を目指す貴族は少なく才能ある者は宮廷魔術師やルーンランドが誇る魔術師隊を目指す。

従って騎士団は自然とお飾り的な物に落ちぶれていた。

口の悪い国民から言わせるとお花畑騎士団、頭の中がお花畑で、見た目の美しさにこだわり手間も懸かる所がお花畑と言われる由縁だ。

「これ以上剣に新しい魔法を付与するのは、きついですね」

少し前に騎士団からの依頼で剣に軽量化や熱撃の魔法等を付与したばかりである。

一時的な魔法と違いイ・コージに求められるのは半恒久的な魔法効果。場合によっては剣に触媒を埋め込んだり魔法文様を刻み込む必要がある。

従って過度の魔法付与は剣の耐久度を著しく下げかねない。

（泊まりですね…）

イ・コージはある事情で貴族嫌いになっていたが、ルーンランドに来てからの無茶振りの連続でさらに貴族嫌いに拍車がかかった気がする。

side リア・クローゼ

（イ・コージさんも、こんな無駄な依頼断ればいいのに）

お花畑騎士団に便利な装備を与えても精々貴族が集うパーティで自慢するしかないのだから。

もつとも全く無駄だと言う訳ではなく、イ・コージの技術を利用した品を魔法研究所では販売しており、その利益は研究所だけでなくルーンランドの国庫も潤していた。

実際にイ・コージがルーンランドに来て最初に手掛けたマジックアイティム”ゴブリンバイバイ”はゴブリンの被害を激減させただけではなく、今や重要な輸出品の1つとなっているのだから。

つまり今回の装備も有用ならルーンランドにおいて、実質的に直接攻撃をになっている傭兵隊に格安でまわされる事になる。

（さてイ・コージさんは今回どんな魔法を使ってくれるんでしょうねー）

恋よりオシヤレより魔法に興味があるリアにしてみれば次々に新しい工夫を見せてもらえるイ・コージの研究室は理想の職場であつた。

side イ・コージ

哀しいかな。弱小研究所、イ・コージは1つの仕事だけに関わっている事ができないでいる。

研究室には騎士団や傭兵隊から依頼されている装備品が魔法付与待ち状態にされていた。

「イ・コージさん、新しい依頼は上手くいきそうですか？」

「所長おはようございます。とりあえず構想はありますので、定時の仕事が終わりに次第取りがかかりますよ」

イ・コージに話し掛けてきたのは魔法研究所の所長ヤ・ツレ。イ・コージは、これほど名を体で表している人間を見た事はない。細すぎる体に薄くなつた髪は、正にやつれた感じがしているし、年は40を少し越えた位な筈であるが、そのやつれ感からか下手をしたら老人にも見えたりする。

「すみません。我が研究所で一番の功績がある魔術師に報いる事が出来なくて」

そう言うことや、ツレは薄くなつた頭をイ・コージに下げてきた。

「止めて下さい。所長が誘ってくれなかったら自分は、この世にす
らないんですから、それに有名になんてなりたくないですし」

（相変わらず油断がないお人だ。下手に急かせないで、こつち
が自主的に徹夜する様に仕向けるんだから）

事実ヤ・ツーレは権謀術数に長けており自分の悲哀たっぷりな容姿
さえ平気で武器にしてしまう。

忙しい所長がわざわざ自分の所に、来た所を見ると、今回の依頼は
それなりに急ぐ物らしい。

「とりあえず来月にお城で開かれるダンスパーティーにまで形して
くれたらいいですから」

つまり、騎士団のお坊ちやま達は剣の手入れに掛ける時間をダンス
パーティーの準備に費やしたいらしい。

（恩ある所長の髪の為にも頑張るとしますか）

決意を新たに装備品に魔法を付与していくイ・コージであった。

イ・コージの日々（後書き）

2作同時連載を頑張ります

イ・コージの望み（前書き）

1日でお気に入り登録が40を越えていました
イ・コージ最初はネタキャラだったのに感謝です

イ・コージの望み

side イ・コージ

真夜中の研究室で中年の男が机の上に置かれた物をジッと見つめていた。

これしかないですね。

依頼からは些か離れていますけども、使い勝手とかを考えると、これが一番ですよ…。

（明日リアさんの反応を見てから決めますか）

イ・コージは冷たい床に寝転がってぼつちやりした体を毛布で包むと眠りについた。

side リア

それを見た時にリアは頭を抱えなくなった。

一応は尊敬をしている上司が研究室の床で寝ていたからである。

（この人は私がいなきゃ研究室に住み着ちゃうんじゃないかな？）

自分も同い年の女の子に比べたら自己に対する関心が薄いほうではあるけども、この上司にはもう少し自分自身を労る気持ちを持って欲しいと思う。

そんな事より、今私がしなきゃいけないのは

「イ・コージさん起きて下さいー。風邪ひいちゃいますよー」

「ふえ、あつリアさんおはようございます」

流石のイ・コージさんでも熟睡は出来なかったらしく、どこか眠たそうだ。

「こんな生活をしていたら体を壊しちゃいますよー」

「ははっ、誰かに心配をしてもらえるなんて久しぶりですね」

それ位でそんなに嬉しそうに笑わなくてもいいのに

「そりゃ同じ職場の人が床で寝ていたら心配しますよー」

「デユクセンに居た頃に研究室で寝ていたら心配より先に研究結果を盗む同僚ばかりでしたから、リアさんそれよりこれを見て下さい」

イ・コージさんが差し出したのは、何の変哲もないフェルト布。

「フェルト布ですよ。これがどうかしましたかー？」

「よく見て下さい」

そう言われてフェルト布を良く見ると布と同じ色の糸で刺繍が施してあった。

「これは魔法陣ですか？」

それにイ・コージさんが刺繍したの？

真夜中の研究室で1人で？

「羊毛に圧力の魔法を掛けてフェルト布を作り、魔力を通わせた絹糸にサビ除去と研磨の魔法陣を刺繍してあります。これを鞘の内部に張り付けるに予定です」

剣を抜く度に剣が磨かれる訳ですか。
でも

「騎士団の中には鞘に宝石とかをはめ込んでいるお馬鹿さんもいますよー？それをバラして内側に張り付けるのは難しいですかー？」

「そんな人には従者さんに直接拭いてもらうしかありませんね。でも軽く拭くだけで剣が輝きますから騎士団の人は自分で磨きたがるかと」

私も試しに預かっている剣をフェルト布で軽く拭いてみたら、手入れがあまりされていなかった剣が直ぐに輝きを取り戻したんです。確かにこれなら見栄っ張りの多い騎士団に受けると思いますー。

「汚れたら交換ですかー。洗ったら駄目なんですか？」

「洗うと刺繍が崩れちゃうんですよ。それに貴族の皆様なら買い換えてくれるじゃないですか。軽い魔力があれば誰でも縫えますから雇用にも繋がりますよ」

「随分と気を使いますねー」

イ・コージさんは使い勝手だけでなく製造方法まで考えるなんて。

「私の名前が出なくても責任は取られますからね。出来る事はしておきたいんですよ。」

それで功績と利益は研究所の物なんですよー

「でもこれだと真似されちゃうじゃないですかー？」

「大丈夫ですよ。最後の防刃の魔法は研究所で付与しますから」

手抜きはなしですか。

結果、フェルト布は騎士団や傭兵隊に大好評になりました。

中には鎧や兜まで磨く人も出て来て、ルーンランドでは汚れ1つない装備をしてる者をフェミニストと呼ぶ様になった程ですから。

side イ・コージ

なぜか所長のヤ・ツレーさんから呼び出しをされました。
何か苦情が来たんでしょうか？

まさかの退職勧告じゃないですよ？

「失礼致します。イ・コージです」

幸い所長室は穏やかな雰囲気です。

でも穏やかな雰囲気からの退職や訓告も良くある話。

「イ・コージさん良く来てくれました。フェルト布の評判とても良

いですよ」

良かった、悪い事ではなさそうです。

「それなら幸いです。それで何の御用でしょうか」

「そんなに緊張しないで下さい。イ・コージさんの評価が高まったから何かプレゼントを贈りたいと思ひましてね。例えば君好みの美しい助手でも構いませんよ」

美しい助手が来た所で何もありませんから、それはいいですね。

「それなら欲しいモノがあるんですが……」

side リア

「研究室の引越しですかー？」

「ここは手狭ですからね。こないだのフェルト布のご褒美として広めの研究室をお願いしたんですよ」

イ・コージさんは嬉しそうに話しているけども、ゴブリンバイバイや今回のフェルト布の売り上げを考えると何とも慎ましい願いなんですけど

「それで良いんですかー？自分好みの女の人を助者として囲っている人もいますよー」

「何を言ってるんですか？そんな事したら目立つでしょ、それに

私にはそんな度量も器量もありませんから」

確かにイ・コージさんの立場を考えると目立つのを避けたいのは分かりますけど、そんな情けない事を堂々と言わないでも

新しい研究室を見ての感想は1つ。

（イ・コージさんは研究所に住み込むつもりですね）

だって個室にベットもあるしキッチンまであるんですから

「ここいいでしょ。ここなら安心してグッスリと眠れます」

そうですね。

ここはルーンランドの心臓部ですから他国の人間が無断で入るのは、ほぼ不可能ですもんね！。

イ・コージさんは見つかる心配がありませんもんね。

イ・コージの望み（後書き）

同僚やら上司とかをだそうかと、そこでサラリーマンの愚痴を募集します

ザコ以上に男性向け小説になる気が

上司を選べないのがサラリーマン（前書き）

なんとこの作品が日別で7位になってました
いいんじゃないか？

上司を選べないのがサラリーマン

魔法研究所は研究開発部・商品作成部・販売部・総務部に分かれています。

私がいるのは研究開発部第2課。

第1課は自由研究をしており、私がいる2課では研究所に届いた依頼に対応しています。

「イ・コージちゃん、こないだのフェルトにクレームが来たからなんとかしてちょうだい」

私に嫌味にたつぷりに話しかけてきたのは2課の開発主任テガ・ラパクーリさん。

いやテガさん、フェルトの開発責任者になりたいって騒いだのは貴男じゃないですか？

「わかりました、届いたクレームを見せて下さい」

.....

・フェルト布でこぼしたワインを拭いたら使えなくなたつぞ。新品と取り替える

・剣を磨いたら鋭くなりすぎて指を切っちゃったじゃないか

・銀のフォークを磨いたら大事なお皿に傷がついたんだ。ママに叱れたら責任を取ってくれよ

これはクレームなんでしょうか？

それとも笑いを取りたいんでしょうか？

そんな事よりテガ主任、開発責任者になっただから、これ位の苦

情はなんとか宥めて下さい。

「嫌味ネズミが来てましたけど、何かあったんですかー？」

リアさん、確かにテガ主任は痩せていて出っ歯でネズミみたいな顔ですけども嫌味ネズミはまずいでしょ。私は眼鏡ブタとかデブ眼鏡とか言われてるんじゃないかと心配になりますよ。

「これです」

クレームをリアさんに手渡すと

「嫌味ネズミはお馬鹿貴族のお守りも出来ないんですかねー？」

どうして女の人って、相手がいないと好き放題に言えるんでしょうか？

聞いている私の胃がもちませんよ。

「作ったのは私ですから私が何とかしますよ」

実際に私が何とかするしかないですし。

通常業務がありますから今日も徹夜ですね…

ベットが早速役に立ちました。

そう喜んでおきましょう。

s i d e リア

テガ・ラパクーリ35才。

ラパークリ男爵の長男で、それなりの魔力はある男。男爵は一代爵位だから、ごり押しに近い形で研究所に就職したみたい。

出世の基本は他人の禪な嫌味ネズミが次に目を付けたのはイ・コージさん。

ヤ・ツレ所長がイ・コージさんの实力を知っているから、良いような物のそれじゃなかったらリア特製のネズミ捕りを設置していたと思う。

「イ・コージさんおはようございます。お馬鹿対策はできましたかー？」

「ええ、ちょっと虚しい感じもしますけどね」

そう呟いたイ・コージさんの目の下にクマが見えました。

これは嫌味ネズミへの仕返しを考えなきゃ。

差し出されたフェルトを見てみたんだけども

「何も変わっていない感じがしますけど」

「変えたのは裏ですよ。ひっくり返してみてください」裏側には細かい注意書きが書かれていました。

・本品を本来の使用目的以外に使うと性能が著しく劣化するのでご注意ください

・本品を使うと剣が鋭くなりますのでご注意ください

・本品は装備品のみにご使用下さい

……イ・コージさんお疲れ様です

side イ・コージ

ホツとしたのも束の間、テガ主任がまたやってきたんです。
思わず主任の仕事の心配をしてしまいましたよ。

「イ・コージちゃん。今ヒマだね、そうだねー、僕今日行かないといけない所があるからさー、これを頼むね」

テガ主任が研究室に置いていったのは宝石が散りばめられ、美しい装飾が施された立派な盾です。

感動するぐらいに見事な丸投げですね。

「主任、これは一体なんでしょうか？」

「それに軽量化・威圧・疲労回復の魔法を付与してちょーだい。材料は揃えておいたから明日までに頼むよ」

ああ、そう言えば誰かがテガ主任はレディスクラブに目当ての女性がいって通い詰めているって話をしていましたね。
既婚者で、その元気はある意味うらやましいです。

.....

ざ、材料不足です。

軽量化に必要な魔石がないじゃないですか！

私に魔石を精製しろって言うんですか。

テガ主任が若い娘とお酒を飲んでいる時に私は実験器具とニラメツ

コ…

ちよつとだけ泣きたくります。

そんな時です、研究室の扉が開きました。

「もうイ・コージさん嫌味ネズミの仕事に、そんな真面目に取り組む必要はないですよー。どうせご飯食べてないんですよ。サンドイッチを作ってきたから食べて下さいー」

「リアさん帰ったんじゃないですか？」

「事務にいる友達から聞いたんですよ。嫌味ネズミがイ・コージさんに自分の仕事を丸投げしてレディスクラブに行ったってー」

恐ろしきは女性の噂包囲網。

「やっぱりそうでしたか？まっ家に帰ってもする事がないですから」

「嫌味ネズミは今頃レディスクラブで鼻の下をのばしているんですよ。悔しくないんですか？」

だからって、リアさんが怒らなくても

「ちよつだけ悔しいですよ。でもその女性はテガ主任と談笑してるんじゃないく、テガ主任のお金と談笑しているんですから。それに気付かないテガ主任こそ哀れなんですから」

研究者は何時も事実を見なきゃいけません。
昔、痛い思いをした私だから言えるんです

「随分とお人好しなんですネー」

違いますよ、そう思わなきゃやってられないんです。

「それにリアさんの優しさがこもったサンドイッチの方がレディスクラブのお酒よりも何倍も価値がありますから」

「サンドイッチで、そこまで喜ばれるとは思っていませんでしたよー」

故郷に帰れない私が女性の手作り料理を食べるのは奇跡に近いんですから

上司を選べないのがサラリーマン（後書き）

次はザコのシャルレーゼ女王とガーグのひいおじいさんの話を更新
予定です

書きためができた時点で更新します

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある(前書き)

レディス・バーはキャバクラと違ってもらえたら

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある

side イ・コージ

「イ・コージちゃん、今日の夜ヒマだよー」

テガ主任、貴方はいつも暇ですよ

「新しい依頼ですか？それなら…」

今は無理ですと、言い掛けたんですが

「依頼じゃないよ。こないだの盾のお礼にいい所に連れて行ってあげるから。じゃ後で」

テガ主任、連れて行きたい場所がバレバレです

リアさんがいる前で誘ってくれて非常にありがた迷惑ですよ

「イ・コージさんもレディス・バーに行くんですか？」

リアさん言葉の節々に棘が見えています。

「行きたくなくても連れて行かれるんでしょうね。テガ主任の魂胆が丸分かりだから断りたいんですけども」

「魂胆ですかー？」

「自分より格好悪い私を連れて行く事で自分を格好良く見せたいんでしょうね。後は専門的な質問をされて困ったんじゃないですか」

テガ主任は、一応魔法研究所の主任なんですから

side リア

イ・コージさんが嫌味ネズミの引き立て役？

冷静に見た目で判断しても人が良さそうに見えるイ・コージさんの勝ちだと思っただけと。

話なんてしたら嫌味ネズミに勝ち目はなんてないと思う。

多分、嫌味ネズミの事だから見栄を張って自慢話しかないと思うし。

そして愛想笑いを本気して1人悦にはいると。

イ・コージさんなら相手の話を聞いて終わりだと思うんだよねー。

男性としてどうかじゃなくお仕事として楽な相手はどっちかは一目瞭然。

それを分かっているイ・コージさんと嫌味ネズミじゃ勝負になる訳がないじゃない。

まあ勝負しているのは嫌味ネズミだけで、イ・コージさんにはそんな気はサラサラない様だし。

もし、もしイ・コージさんもレディス・バーにはまったら…
なんかムカつく。

side イ・コージ

テガ主任、そのファッションはきついです。

貴男は体が細いんですから、ダブダブな服を着ると余計にみすばらしく見えますって。

第一、その格好をしている若い子は前程見ませんし。

「イ・コージちゃん、あまりレディス・バーに来た事ないでしょ。僕に任せておいて」

テガ主任、そんな活気に溢れた姿初めて見ましたよ。

「はあ、よろしく願います。後明日も早いんで1時間ぐらいで帰ってもいいでしょうか？」

ぶつちゃけ、定時出勤なんですけど

「イ・コージちゃん、そんなにノリが悪いと嫌われちゃうよ。でもアフターの時には帰ってね」

テガ主任、今日は平日だからレディス・バーの皆さんも早く帰りたいと思うんですけど

「わかりました。先ずご飯はどうしますか？」

「？何を言ってるの？直行するんだよ」

いやいや、まだ準備できてないから確実に嫌がられますって

「すいません、空酒ができないんで軽く食べていきましょう」

「仕方ないなー。そんなんだからイ・コージちゃんは太るんだよ。そうだ！ピンクちゃんが言ってたパスタ屋さんに行こう」

おっさん2人でパスタですか？

それとピンクさんは絶対に本名じゃないですよ。

……

浮いてます。

周りは若い人ばかりで、私とテガ主任は確実に浮いています。それと周りからの視線がとっても痛いんですけど。

その後、テガ主任は絶対に捨てられる運命となる花束を購入。

そして満面の笑顔でレディス・バーへ。

お店の名前はプリティ・キャット、確実に本性は怖い猫さんがいます。

「いらっしやいませ。あつテガちゃんいらっしやい。ピンク寂しかったー」

テガ主任、今の営業トークですからね、そんなに喜ばないで下さい。

しかしよく喋りますね。

会議の時も同じぐらい喋って欲しいんですけど。

「初めまして、アクアです。お客様初めてですよね」

そしてここに来るのも最後です

「あまり賑やかな場所は得意じゃないので、私は研究室の方が落ち着きますし」

「お客様も魔法研究所の方なんですか？それなら見てもらいたい物があるんですけども」

依頼だとお金が発生しますよ。

「アクアちゃん、イ・コージちゃんは僕の部下の中でも優秀な男だから任せたらいいよ。もちろん依頼料はタダだよねイ・コージちゃん」

つまり私にタダ働きしろと。

まあ無言で飲んでるより何かしての方が気が紛れますし

「これなんですけども。ペンダントに付与してある血流促進の魔法が効かないみたいで」

ペンダントで血流促進って肩こりでもするんですかね

「アクアちゃん胸が大きいから肩がこるんでしょう？」

テガ主任、セクハラ発言するのは止めて下さい。

私も同じ人間に思われるじゃないですか。

……

ペンダントにはブラッディルビーがあしらわれており、その周りには魔法陣が施されていました。

「どこか明るくして大丈夫な部屋はありますか？この薄暗い中じゃ作業ができませんから」

私お客さんですよ。

作業をする場所は事務所ですか。

懐から簡易加工セット（拡大鏡・彫金タガネ・魔力テスター等）を

取り出して作業に取りかかろうとしたら

「あの私はどうしたら良いですか」

「お仕事に戻って良いですよ」

（魔力経路が欠けていますね。これなら直ぐに治せます）

「それでボーイさんにペンダントを渡して帰っちゃったんですかー？
一口も飲まないで」

リアさん人の疲れた話を聞いて喜ばないで下さい。

「戻って来たらテガ主任がハツチャケまくっていて混じる気が失せ
たんですよ」

それを聞いて更に喜ぶリアさん。

テガ主任の新しいネタを聞いたから嬉しいんでしょうか。

その日の昼の事。またヤ・ツーレ所長に呼ばれたんです。

「イ・コージさん、今晚レディス・バーに付き合ってください」

この時は、あんな後味の悪い依頼に繋がるなんて、想像もしていませんでしたね。

サラリーマンのアフターファイブにはお付き合いもある（後書き）

さすがにキャバ嬢の方やボーイさんは見てないか

でも上司や妙に気合いの入った知人で行って困った事がある人はいるか

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？（前書き）

明日は休みって事でイ・コージも投稿

この小説は若い人が読んで楽しいんだろうか？

高校生や中学生の人（特に女子の方）はおじさんが主役って読む気は起きないかも

でもサラリーマンに読んでもらいたくて書いた小説だし良いとしましょう

ちなみに今日は法人の飲み会、まずは理事長にビールをつぎに行かなきゃ

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？

side イ・コージ

所長に連れて来られたのは昨日とは違うレディス・バーでした。
店の名前はセクシー・バタフライ。

きつとお金を持ち去っていく蝶がいるんでしょう。

「ツレ様いらつしゃいませ」

「奴は来ているか？近くの席に頼む。それと少しの間は誰も来なくていいからな」

まさか所長は常連なんでしょうか？
最後の奴って誰なんですかね？

「イ・コージさんはあまりこういう店に来ないでしょ？まあ私も接待の時しか来る気はありませんしね」

（上客の貴族や騎士への接待ですか。それと色仕掛けを使う時とかも使いそうですね）

「イ・コージさん、ルーンランドには慣れましたか？」

世間的な挨拶から何かを探るんでしょうか？

「ええお陰様で、助手のリアさんも良くしてくれますし」

「それなら安心です。この短期間で人気商品を開発してくれて感謝

をしていますよ」

誉められたからって油断してはいけません。
牽制を兼ねたジャブの後にガードを下げてくる、下手に飛び込めば
カウンターをもらいそうです

「私は開発をしただけです。後は制作部や販売部の力ですから」

そんな時です。

隣の席から若い男が大きな声で叫んだのは

「よっしゃあーあ。ダンペリ入れちゃうよ」

「キャッー、さすがはクリス君。だーい好き」

大好きなのはダンペリで入ってくるキックバックなんでしょうけども

「若いのに随分とお金持ちの方もいるみたいですね」

「クリス・アレクサンドラ。アレクサンドラ子爵家の長男です。クリス様は少し前にファイニー伯爵家の令嬢マリアンヌ様との結婚が決まりました」

所長は私にだけ聞こえる様に呟きました。
いわゆる政略結婚てやつですか。

「それなら不味いんじゃないですか？こんな場所で大金を使っている
ちゃ」

「アレクサンドラ子爵からの依頼です。レディス・バーの女に、の

めり込んだクリスの目を覚まして欲しいとの事、イ・コージさん頼めますか？」

「とりあえず詳しい状況を教えて下さい。それによって創る物が変わりますので」

「流石はイ・コージさん、詳しい資料は明日届けます。それでどうします？女性を呼びましょうか」

今、色仕掛けにのつたら断れなくなるじゃないですか

「いえ、ちよつと調べ物があるので研究室に戻ります」

イ・コージが帰った後にヤ・ツレが満足げな笑みを浮かべて呟いた。

「さてイ・コージさんは今度はどんな物を創ってくれるんでしょうかね」

所長から届いた資料によるとクリスさんはかなりのお金をつぎ込んでいるみたいです。

お目当ての女性は、お店ではアゲハと名乗っていますが本名はデボラ・ポー。

「おはようございます。イ・コージさん真剣な顔をして何を読んでいるんですかー？」

「リアさんおはようございます。新しい依頼ですよ」

.....

「それで、このデボラさんとクリスさんは恋仲なんですかー？」

「いえデボラさんには、きちんと彼氏がいるそうですよ。クリスさんの片思いを利用してゐるって感じてしょうね」

「婚約者があのマリアンヌさんなら、分からなくもないですけどねー」

確かマリアンヌさんって、伯爵家の令嬢ですよ

「リアさんお知り合いなんですか？」

「昔、同じ学校に通ってました。プライドが高くて相手の判断基準は家柄とか容姿が全てな方でしたよー」

クリスさんの見た目は私よりは格好いい程度です。
しかしそれなら、何で？

「それならマリアンヌさんは今回の婚約に納得していないのでは？」

「お金ですよ、お金。ファイニー伯爵家は代々の贅沢がたたって台所は火の車、一方アレクサンドラ家は領地で金脈が見つかったお金はありますからねー。後は名誉が欲しいって所じゃないんですかー？」

マリアンヌさんは贅沢がしたいから嫁ぐと、アレクサンドラ家は伯爵の血を入れる事で自家の格をあげたいって思惑ですか。

「でもクリスさんのご両親は、なんで何もいわないのですかね？」

「言える訳ないじゃないですかー。金脈はクリスさんがダウジングで見つけたそうですよー」クリスさんに見れば金脈を見つけたばかりに、お金目当ての気位が高いお嬢様と結婚をさせられそうなんですネ。

それで夜の蝶に逃げた訳ですか。

（所長に2人が顔を合わせる日があるか聞いておきますか。それまでにアレを作っておかないといけませんね）

アレクサンドラ家邸宅

今日クリスさんの家に、マリアンヌさんが訪問するとの事。

私は所長にお願いをして2人が過ごす予定の庭園を見下ろせるテラスに潜んでいます。

（イ・コージさん、来ました。あれがマリアンヌさんです）

何故かリアさんも付いて来てくれました。

あの方がマリアンヌさんですか：令嬢は美少女しかいないというのは、庶民の幻想だった様ですね。

（それじゃ早速試してみますか）

（イ・コージさん、その指輪なんですかー？ ついてる石は水晶ですかー？）

（正解です。純度の高いクリスタルに精神反応の魔法を付与してあります。指輪にはの欲求感知の魔法陣を彫りました。だから対象者に魔力を向けると）

side リア

イ・コージさんがそう言った瞬間に透明だった水晶が金色に光りました。

（マリアンヌさんは予想通り金色ですね。クリスさんは暗い赤紫ですか…）

（イ・コージさん1人で納得していないで私にも教えて下さいよー）

イ・コージさんの説明によると、この指輪は対象者の欲求や心理状態を色で表すみたい。

金色は見栄や金欲、明るい青は癒して暗い青は拒絶、明るい赤は情熱で暗い赤は怨恨や怒りを表すんだって。

つまりマリアンヌさんはクリスさんをお金としか見てなくて、クリスさんがマリアンヌさんに感じてるのは拒絶と怒りになるらしい。

（凄いいじゃないですか！ またヒット商品の誕生ですね）

（こんな物を買ったらみんな人間不信になっちゃいますよ）

イ・コージさんは前に友人に頼まれて同じ物を作ったんだって。

その人は奥さんが浮気をしていると心配してみたいんだけども、浮気相手は自分の実の弟。

奥さんは自分には笑顔だけど無色（無関心）、弟には綺麗なピンク（恋心）の反応が出たみたい。

結果、イ・コージさんの友人は人間不信になり行方不明に。

行方不明になってから半年後には奥さんと弟さんが結婚していたんだって。

確かに人間不信になる指輪じゃ売れませんかよね！。

イ・コージ、新しい依頼で元気をなくする？（後書き）

今悩んでる点

複数ヒロイン&イ・コージの暗黒面（前歴が前歴だけに）を取り入れるかどうかです。

感想お待ちしております

イ・コージの過去と闇（前書き）

昨日頂いた感想を元に話の進め方を決めました

イ・コージの過去と闇

side イ・コージ

「所長、これが今回のマジックアイティムになります。実験の結果マリアンヌさんは金欲、クリスさんは拒絶と怒りの感情を表しました。これをクリスさんに貸せばレディス・バーには通わなくなると思います」

「貸すんですか？」

「周りの人間が全てが自分に良い感情を持っているなんてありえませんがね。下手したら人間恐怖症になりかねません。レディス・バーに通わなくなっても、それじゃ意味がないですから」

自分が作った物で人が不幸になるのは、あまり愉快じゃないですし

「わかりました。クリスさんには私から新アイティムの使用モニターとして協力依頼の形で渡します」

side クリス

金・金・金・みんな僕の事を金づるとしか見てないんだ。

アゲハちゃんもマリアンヌさんも執事もメイドも……

金脈をなんて見つけなきゃ良かった。

こんな指輪の使用モニターの協力なんてしなきゃ良かった。

僕は金しか価値がない人間だなんて知りたくもなかった……

side イ・コージ

今日も所長に呼ばれました。
まさかあの指輪じゃ効果がなかったんでしょうか。

「イ・コージ君、結果だけ言うと 크리스さんはレディス・バー通いを止めた。しかし…」

あー、所長の顔が厳しいですね。
予想はしていたんですけども

「 크리스さんは、人間不信になりましたか。流石にアレクサン德拉子爵から苦情が来ていますよね」

減点物ですね。

下手したら…まあ元の木阿弥と思いきましょう。

「いえ、むしろ感謝されました。マリアンヌさんも婚約を解消したみたいですよ」

それじゃ 크리스さんが人間不信になっても仕方ないですよ

「親御さんも同じ穴のムジナですか。わかりました、最後まで関わるとします」

アレクサン德拉子爵にとって大切なのは家名な様です。
指輪を作った責任、そして同じ人間不信だった私には 크리스さんと話す責任がありますね。

side クリス

部屋から出るのが怖い

誰かに会うのが怖い

あれから僕は部屋から出る事ができないでいた。

そんなある日、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「クリス様、失礼します」

そう言つて部屋に入ってきたのは2人の男性。

1人はヤ・ツーレさん、もう1人は痩せたヤ・ツーレと対照的に太った中年男性。

「クリス様指輪のモニター協力ありがとうございます。開発者のイ・コージ共々こうしてお礼にをしたくてお邪魔させてもらいました」

ヤ・ツーレさんもイ・コージさんも穏やかな笑顔を浮かべている。

（あんな表情をしても、腹の中じゃ僕の事を金づるってしか見てないんだ）

でも指輪は金色じゃなく澄んだ青色をしていた…

「作った本人が言うのもなんですが、その指輪はあくまで対象者の一番強い感情を表すだけですから決して万能ではないんですよ。それに人の気持ちなんて結構変わるものですね」

「慰めですか？」

確か青は癒しの色、癒しと言えば聞こえはいいけどもそれは哀れみとも捉える事ができる。

「いえいえ、今の貴方を見ていると他人に思えなくて。おじさんの老婆心だと思って下さい」

イ・コージさんは、どこか遠くを見ながら話始めたんです。

「昔ある国に1人の少年がいました。その子は魔術の才能があり、その才能を磨く為に必死に努力をしたんですよ。友達とも遊ばず恋もしないで来る日も来る日も魔術を磨いたんです。努力は人を裏切らないと先生に言われた言葉を信じてね」

イ・コージさんは深いため息をついた後に、また話始めました。

「少年は夢を叶えて自分の国の魔法研究所に勤める事ができたんです。少年は魔術の研究に没頭し気づけばおじさんになっていました。でもある日おじさんは全てを失いました……確かに努力は裏切りませんでした。が人に裏切られちゃったんですよ」

「裏切られたって、何があっただんですか？」

多分そのおじさんはイ・コージさん……

「上司に研究成果を奪われたんですよ。しかも歪な方に変えられてね……他人を信用できなくなったおじさんは研究成果を持ち出して研究所から逃げたんです。」

研究成果が欲しい上司は追っ手を差し向けてきました。殺してでも

奪えって命令をしてね」

イ・コージさんの顔が闇に包まれました…

「自衛とは言え人を殺めたおじさんは故郷にも人の群れにも戻れなくなつて孤独となり、終いには冒険者に討伐をされて地下牢に入れたってしまったんですよ。でもね貴方は裏切られても誰も傷つけなかった、だから大丈夫です。そのおじさんも違う国で頑張っています。だから貴方も歩きだして下さい」

side イ・コージ

「クリスさん大丈夫ですかね…」

「後は本人次第でしょう。それよりも困った人が着いて来ていますね。あそこの路地に入つてお話を聞きますよ」

やれやれ、所長は面倒事は早めに潰すタイプなんでしょう

路地に入つて人氣が途絶えた時です

「レイジー、アイツだよ。あの親父が来てからカモも来なくなつたんだよ」

あれはクリスさんがはまっていたアゲハとか言うレディス・バーの隣のレイジーって言う人が彼氏、所謂ヒモらしいです

「おっさん達が余計な事したせいでよー。デボラが稼げなくなちゃったんだぜ。責任をとって金をよこしな」

「お金なら自分で働いて稼いで下さい。貴方みたいなお子様なら親御さんからお小遣いをもらうのが一番でしょうけども」

「ああん！ガキ扱いしてんじゃないよ。俺はキレたらやばいんだぜ、素直に金をよこしな」

貴方の言動がお子様そのものなんですけどね

「所長どうしますか？」

私は立場上、公的機関とは関われないますから

「後始末は私がしますのでイ・コージさんの力を見せて下さい」

「おっさん俺は人を殺した事があるんだぜ！殺されなくなったら素直に言う事を聞きな」

ナイフを抜きましたか……

「嘘ですね。人を殺めた人間はそれを手柄みたいに吹聴しませんよ。それに貴方には人を殺した暗さがありません」

イ・コージの顔が暗い闇に包まれる。

目に至っては深い洞穴を思わせる無限の闇を連想させる程に冷たく暗い物となっていた。

「お望み通り、私は貴方を1人の大人として扱います。だからきちんと責任をとってもらいますよ」

side ヤ・ツレ

イ・コージさんは袖を捲り上げましたね

（あれはブレストがですか。埋め込んであるのは触媒の魔石ですね）

その中にある黄色い魔石にイ・コージさんが、触れるとレイジーを黄色いガスがを包み込みました。

（あれが報告書にあったイ・コージさんの気体魔法ですか）

「えっ！レイジー何したの？」

レイジーは床に倒れ込み涎を垂らして呻き声をあげています。
あれは恐らく

「殺す価値もなさそうなので、麻痺性の気体魔法で大人しくなってもらいました」

イ・コージさんの声には一切の感情がありません。

「なんで、こんな酷い事をするの？レイジーは、まだ何もしてないじゃない」

「貴女は馬鹿ですか。何かされたら困るから麻痺させたんですよ？ご希望なら腐食魔法で顔を潰してあげますよ。もちろん貴女も一緒

にね」

女性の悲痛な叫び声に反比例するかの様にイ・コージさんの声は冷たくなっていきます。

「やめてっ。謝るしお金も払うし何でもするから」

「自惚れないで下さい。私は貴女に価値を一切感じていません。貴方達は大人なんでしょう？社会のルールから逸脱しておいて被害者面をするもんじゃありません。後は私の後ろにいる方が貴方達に処断を下してくれますよ」

（流石は元死刑囚ですね。普段の温厚な顔の下には酷薄な獣が眠っていましたか。これなら違ってお仕事も頼めるでしょう）

女性が私を哀願するような目で見てきます。

この2人の使い道ですか……

「貴方達2人には鉱山で働いてもらいます。肉体労働をしてお金の大切さを学んで下さい」

イ・コージの過去と闇（後書き）

感想お待ちしております

おじさんは若いアイドルの話をされると困る（前書き）

ちよつと作者の実体験が元になっています

おじさんは若いアイドルの話をされると困る

side イ・コージ

今日も呼ばれました所長室。

所長絡みの依頼はハードルが高いのが多いから正直勘弁して欲しいんですけどね。

「失礼しますイ・コージですが」

「良く来てくれたね。まあ立ち話もなんだから掛けて下さい」

所長は穏やかな笑顔で出迎えくれました。
でも油断しちゃいけません。

所長は同じ笑顔でレイジーさんとデボラさんを山奥の鉱山に送ったんですから、しかもアレクサンドラ家所有の鉱山にです。

クリスさんは穏やかな性格で鉱山で働く人に慕われていたみたいですから、どんな事になっているか想像もしたくないですね。

「イ・コージさん、前に作ったゴ布林バイバイを人に応用できませんか？開発期間はお城でのダンスパーティーまで」

ほら来た、ダンスパーティーまで2週間しかないのに笑顔で無茶振りをするんですから。

「内容によります。ゴ布林バイバイを応用した物は使い方によっては大変危険ですから」

「相変わらず慎重ですね。ところでイ・コージさんはマジックガー

ルズはご存じですか？」

「いえ全くわかりませんけど」

「今ルーンランドで大人気のグループアイドルですよ。ダンスパーティーではマジックガールズのコンサートもあるんですけども、彼女達のファンはちょっと暴走気味でしてね。ステージにあがろうとしたりするんです。流石にお城で、それはまずいですから」

傭兵隊や魔術師隊の皆様がガードをするとファンが萎縮するから無理でしょうね

「それで人間用の結界が必要な訳ですか。でもお城にくる人なら自重するんじゃないですか」

いくらお花畑騎士団の方でも王様の御前で暴走はしないでしょ

「今回のダンスパーティーは年に1回だけ一般市民がお城に入れる日なんですよ。楽しみにしている市民が多いから中止にはできないんです」

ちなみに入場条件は無腰である事だそうです。

「ファンがステージに近づかなければいいんですよ」

しかもコンサートの邪魔をしない様にですよ

「それともう一つクリスさんが、こないだの指輪を貸してほしいそうです」

おじさんの気持ち伝わらなかったんですか

「それは何か訳があるんですか？」

「今回のダンスパーティーは女性が男性をダンスに誘うんですよ。市民の女性が貴族を誘って結婚したなんて話もありますから」

なんでしょう、そのモテない男性への嫌がらせみたいなパーティーは私は普通のパーティーでもあぶれた男性だけで飲んでるんですよ

「つまり婚約を解消したクリスさんにお誘いが集中するって事ですか。殆どは財産目当てだからフルイにかけたといって事ですか」

願わくは純粹にクリスさんを慕う女性に来て欲しいですよ

「ええ、婚約解消の話は既に町中に広がっていますから。

それに1度成立したカップルはダンスパーティーが終わるまで解消できません」

お誘いが来ない私には関係ない情報ですね。

それにダンスパーティーには出席しませんし。

だってデュクセン関係の人が来ていたらマズいじゃないですか。

「分かりました。後から指輪を持ってきます」

今の私にできる事は誰かが幸せになる為のお手伝いですしね。

所長室から帰る廊下でテガ主任に会っちゃいました。

「イ・コージちゃん。見て見て、ダンスパーティー用に新しいスーツを作ったんだ」

主任、既婚者がその気合いはまずいんじゃないですか

「はあ、ダンスパーティーに奥様はいらっしゃらないんですか」

「……当然うちの奥さんも来るよ……」

あつ主任のテンションがダウンしました。

「お仲がよろしい様で羨ましいですよ」

「仲が良い？ご飯も作ってくれないのに……僕の目当てはマジックガールズだよっ！」

そりゃアイドルに夢中の旦那にはご飯は作りたくないかと

「マジックガールズってそんなに人気があるんですか？」

流石に私の年になるとアイドルに興味はないですし

「……人気？なに当たり前の事を言ってくれちゃっているの？初期メンバーからのファンの僕の前でそれを言うかい？いい、分かった。テガ主任のマジックガールズ講座を開始してあげる」

……

主任の魂の叫びは約1時間続きました。

私の頭に残った情報は、今のマジックガールズは3期メンバーで、猿人族アリスさんとキャロルさん

エルフのフローラさん

犬人族のチエルシーさん

猫人族ソニアさんの

5人構成だと言う事だけです。

主任は歌や5人の誕生日や趣味・特技を熱弁を振るって教えてくれたんですね。

でも収穫がありましたよ、主任の熱狂振りはマジックアイティムを作る際の参考になりますから。

「イ・コージさんお帰りなさい。随分と遅かったですねー」

「そこでテガ主任に捕まりまして、1時間程マジックガールズの講習会を聞かされましたよ」

「マジックガールズですか。イ・コージさんも好きなんですか？」

大変です、リアさんが誤解をしているみたいです。

「所長に言われるまで知りませんでしたよ。まあ主任の熱狂振りは今回の依頼の参考にさせてもらいますよ」

「確かにマジックガールズのファンは怖いぐらいに熱狂的ですからねー……」

「今回の依頼はそのファンの方々を抑える物です。私は2週間の間は残業をしていきます」

「イ・コージさん忙しい所をすいませんが私からの依頼も受けてくれませんか」

リアさん私に2週間お泊まりをしろと？

おじさんは若いアイドルの話をされると困る（後書き）

マジックガールズで設定があるのは1人だけです
今回は叩かれる内容だったかも

助手からの依頼

side イ・コージ

「リアさん、それで依頼というのは何でしょうか」

「女の子が人混みの中を誰にも気付かれずに移動する手段が欲しいんですけど。例えばダンスパーティーとか」

リアさんにも誘いたい男性がいるんですね。でも何故か寂しい気持ちになりました。

「詳しい事情を教えてくださいませんか？それによって創る物が違いますから」

「絶対に内緒にしてもらえますか？」

「お任せ下さい。可愛い助手の幸せには協力を惜しみませんよ」

「ち、違いますよー。使うのは私じゃないですからー」

何でしょう、このホツとした気持ちは。

「そ、そうですか。それは早とちりしましたね。それじゃ改めて事情を教えてください」

「明日、本人を連れて来ますのでー。その時にお話します」

それじゃ今日は結界の開発をしますか。

次の日の夜

リアさんは定時で帰宅しました。

多分お友達を迎えに行っただんでしょね。

……

何でしょう。

あの過剰包装みたいな服を着た方は。

「チエルシーちゃん、もう大丈夫だよー」

「先輩、本当に大丈夫なんですか？」

依頼者の方は、ようやく過剰包装を脱いでくれました。

中から出てきたのはショートカットで黒髪の元気の良さそうな娘。

あれは犬耳ですかね？

犬人族の娘さんなんですよ。

「先輩って事はリアさんの後輩ですか。良かったら事情を話して下さい」

「先輩、顔を出したのに全力でスルーをされました。僕はまだ無名なんですわっ！」

いや初対面なんですから当たり前でしょ。

「チエルシーちゃん、イ・コージさんは昨日までマジックガールズを知らなかった人だから」

「リアさん仕方ないでしょ。私はアイドルとか興味ないんですから。それじゃチエルシーさん事情を話して下さい」

「先輩、興味がないって言われた上に僕の名前を呼んでも気付いてないです。あれはわざとなんですか」

「あれがイ・コージさんなの。私が説明してあげるからねっ」

何でしょう、この珍獣扱いは。

気まずいです。

リアさんの後輩がマジックガールズのチエルシーさんだったなんて、私、人気アイドルの前で貴女を知りませんって言っちゃったんですよ。

「それでリアさん詳しい事情を教えてくださいませんか？」

チエルシーさんは若干涙目なんですよ。

犬人族の特徴の耳もしおれちゃっていますし。

「えっとチエルシーちゃんは一昨年までアレクサンドラ家にメイドとして仕えていたんですよー」

「アレクサンドラ家ってクリスさんの御実家のアレクサンドラ家ですか？」

「クリス様はアレクサンドラ子爵の嫡男です。さん付けは無礼ですっ！」

チエルシーさん、そんなにムキにならなくても、犬耳がピンツと立つちやてますよ。

「チエルシーちゃん、まだ言ってなかったけどモイ・コージさんは私の上司なだけじゃなくクリスさんの大恩人なんですからねー」

.....

「も、申し訳ございません。知らぬ事とは言えクリス様の恩人に無礼な口を聞いてしまい...それにしてもレディス・バーの女といいファイニー家の馬鹿娘といい僕がお側にさえいればクリス様に近づけさせなかったのにー。よくも僕のクリス様をー絶対に許さないっ」

「えーとリアさん、チエルシーさんが誘いたい相手ってクリスさんですか？」

「チエルシーちゃんは昔からクリスさんを慕っていたんですけども、メイドと嫡男じゃ釣り合いがとれないって理由でアイドルになったんですよー」

主任が聞いたら発狂しそうな理由ですね。

「チエルシーさん貴女がクリスさんを慕う気持ちによこしまな物はないですよね」

「当たり前です。クリスマス様はメイドの僕に勉強を教えてください、美味しいお菓子をくれたり、僕が熱っぽい時なんて内緒でご自分のベッドで休ませてくれた人です。僕は事務所の社長よりもファンよりもクリスマス様が大切なんですっ！」

主任すいません。

クリスマスさんとチェルシーさんの幸せの為に本気を出させてもらいます

「リアさん、これから2週間私の食事を研究室に届けて下さい。私はダンスパーティーまで研究室にこもります」

罪滅ぼしにはなりません。が不幸を減らして幸せを創らせてもらいます。

side リア

「イ・コージさんって不思議な人ですね。僕より依頼内容に興味を持たれるなんてアイドルとしては悔しいんですけど」

「イ・コージさんはアイドルだけじゃなく、下手したら自分の幸せや健康にも興味が無い人だからねー」

下手したら魔術研究以外は興味が薄いかもしれない

「でも先輩はイ・コージさんに興味があるんですよ？まさかあの先輩が甲斐甲斐しくお料理を作るなんて驚きです」

「それも助手のお仕事。それにイ・コージさんはほつといたらパンだけの食生活になっちゃう人なんだからー」

しかも食べながら製図を書いたり魔法陣を彫ったりするしー

「僕はあの人なら先輩を理解してくれると思いますよ」

「人の心配よりもー自分の事を考えなさいー。私やイ・コージさんにできるのは、あくまで移動手段だけなんだからね」

さて、私は上司の健康の為に野菜を買って帰りますか。

助手からの依頼（後書き）

ちなみにリアの髪の色はピンクです

イ・コージもいつか1日2話更新してみたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5132y/>

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

2011年11月23日17時25分発行